

編集後記

- 今号の特集の「宣教師と西南学院」というテーマで、田中輝雄先生と河野信子先生に得がたい宣教師の思い出を書いていただいた。河野先生は大学開学の最初の卒業生であり、特にグレーヴス先生、コーブランド先生への思い入れの深さが心に残る。田中先生原稿も学長時代に開催した「宣教師との懇談会」の話が興味深く、宣教師自身の意識の高さが偲ばれる。お二人の原稿は資料としても貴重である。
- シャフナー先生には「宣教師辞任の前と後」と題して執筆していただいたが、SBCの外国伝道局との考え方の違いが顕著になった経緯を詳しくご紹介いただいた。辞任に至るまでの語りがたい心情も語っていただき感謝である。
- 座談会では、「宣教師と西南学院」をテーマに宣教師の貢献・意義などを志渡澤亨先生、林利久さん、ハンキンス主事、古澤嘉生先生、村上隆太先生に熱く語ってもらった。当初の予定時間を大幅に超えて盛り上がったが、最後に、宣教師についての今後の希望・期待にあるように「宣教師に代わる何かが必要」だろう。
- 前号に続いて、他校の百年史編纂研究で「同志社百年史」を取上げた。執筆の依頼時には西南女学院にお勤めだったが、この4月に西南学院大学に赴任された金丸英子先生に執筆をお願いした。同志社がキリスト教学校として戦時下、あるいは大学紛争という厳しい時代をいかに記述しているかを丁寧に調べ、「まとめ」には西南学院百年史の編集方針の明確化など4点の提言をいただいた労作である。写真は同志社社史資料センターにお願いし、貴重な写真を借りることができた。ご協力を感じたい。
- 「西南学院とアジア・太平洋戦争」と題して、戦争中、旧制中学に在籍した内海敬三先生に執筆いただいた。ご自身の記憶に加え、当時のグリーの先輩、同輩にも尋ねてまとめられている。さらに伊藤武雄氏のことを調べにわざわざ桐朋学園まで出向かれたご苦労に感謝したい。
- 寺園喜基院長からは、宣教師の記念碑設置に関連して「西南学院の創立年を見直してはどうか」との提言がなされた。創立の年の決定については規定がないので、C.K. ドージャーらが開設した福岡バプテスト神学校にその源流を求めようというものだ。百年史編纂準備委員会でもこの提言を重く受け止めていくべきだろう。キャンパスの植物を「西南遺産」にしようとする篠崎珣さんの原稿も貴重である。
- 西南学院に宣教師がいなくなった今、全く同じ状況ではないが、C.K. ドージャーが西南学院を去ることになったときの西南学院関係者が味わうことになった喪失感、戸惑いに思いをはせる昨今である。しかし宣教師不在になったのは時代の流れというべきか。ひとつ歴史の折り目であることは確かであろう。西南学院も今後、自分の力で歩き出さなければならない。歴史を見つめ、生かす役割の一端をこの紀要も担っている。(世)